

## 応援席から観た甲子園

鎌田 耕一郎（新8回生）

昭和30年、岩高の野球部が夏の甲子園大会に出場した。創立以来70年の長い歴史の中で、春夏の甲子園大会を通じて唯一の出場であるから、このことがいかに素晴らしい実績であるか言うまでもないことである。私はたまたま、このときのチームの主力を構成した高校3年の選手たちと同学年であり、また応援団長であった関係上、大変貴重な体験をさせてもらった。

私が中学入学当時から、野球部は、後にプロの南海ホークスの投手として活躍した円子さんや小武方さんがおられたことでもわかるように、常に甲子園行きの候補であったがあと一步のところでそれを果たせなかった。

それに較べて昭和30年のチームは、大会が始まってそれ程強いとは思われていなかった。前年秋からこの春の練習試合まで、芳ばしい成果は聞かれなかったからである。それがいざ本番の県予選が始まるや、毎試合劣勢の予想を覆し次つぎに勝利を重ね、ついに優勝を遂げてしまった。さらにこのあとので行われた青森、秋田を加えた奥羽大会を勝ち抜いた。

いよいよ甲子園出場である。岩高関係者にとっては、まさに夢のような出来事だった。

チームの特徴は、田中捕手を中心に全員がよくまとまっていたが、特に目立つ選手もいなかった。しかし、結果的にみると、すらりとした体型の左腕からの軟投で、一見打たれそうで実際には最後まで決して打ち込まれなかった2年生村川投手、小粒ではあったが試合が終わってみるといつも相手チームより安打数でも勝った打線と、当然勝べくして勝ったと言える。このような連勝チムの応援は実に楽しく、いつも感動を与えてもらった。

甲子園大会が国民的な行事のように思えるのは、当時も今も変わりはないが、応援の方も規模の大きさ、熱の入れ方など同様である。

しかし、学校も父母も当時、甲子園への応援団を組織するゆとりがなかったと思われ、阪神地区にいる卒業生や県出身者が応援してくれるだろうということで、結局学校側からは行かないということになった。

それならせっかくのチャンスを活かそうと、生徒たちで有志を募り見学に行こうということになったが、阪神地区に親戚や知人のいる者は少なく思案にくれていたところ、このことが中村嘉明先生の耳に入り、妹さんが大阪で医院をやっている方と結婚していて、なら泊まることができると言われ、結局私を含め数名がお世話になった。他にも親戚等に泊まった生徒と合わせて10余名が、このときの野球見学という名の郷里からの応援団であった。



大阪在住岩手県人の即席応援団

甲子園で驚いたことは、グラウンドとスタンドの広さ、そして対戦相手である神奈川県法政二高のブラスバンドを擁する大応援団であった。こちらはほとんど何の用意もないまま、生徒10余名が指定された応援席に集まったが、あまりの彼我の差に心細いことこの上もなかった。

しかし、そのうちに在阪の岩手県出身の方などが集まり、300人くらいの即席応援団となった。オーケストラに対する花見会場の手拍子のようなものではあったが、郷里出身者の手作り応援席は、心がひとつになり非常に盛りあがった。

試合はダークホースと言われた相手に3対0で快勝、ユニークな応援ぶりも翌日の新聞にとりあげられた。

ところで次の試合は3・4日後だったが、正直なところ岩手を出るときそこまで考えが及ばず、宿泊先にはご迷惑をかけ、また、所持金も不足し急拠親に送金を頼んだりしたがその間他の試合を見たり、看護婦さんに宝塚見物につれて行ってもらったり、珍しい体験もできた。

次の対戦相手は香川県坂出商業で、応援席は看護婦さんも加わったり、初戦のとき以上に人数も増え熱気もあったが、試合の方は善戦むなしく1対3で惜敗した。

今でも同期会などでは、当時の野球のことが話題になることが多く、つい昨日のこのように思い出され皆力が入る。

応援席側から改めて敬意と感謝の意を表したい。  
幸運にも母校の熱戦を甲子園で応援するという、またとないチャンスに遭遇できた。

青春の思い出をありがとう。

鎌田 耕一郎氏(新8回生)が石桜70年誌に寄稿されたものより、  
本人の了解をいただき引用させていただきました。